

模図かずお論

マンガ表現と想像力の恐怖

高橋明彦著



(書号社・3888円)

著者は日本近世文学研究者である。そのことは本書の随所に生きている。だから本書が近世文学研究者に衝撃を与える可能性について、私は無関心ではない。性について、私は無関心ではない。言葉が本書に輝出する。それは二つの焦燥に起因する。その位置を占める典拠論の壁をなかに突破できないこと。模図かずおへの無理解読者と典拠論に自足する研究者―彼らへの感情的な反発が本書のモチーフの一つであり、それを論理的に「乗り越えよう」としたのが本書である。だから、本書の基調にはフアンティック(熱狂的)なものが感じられる。

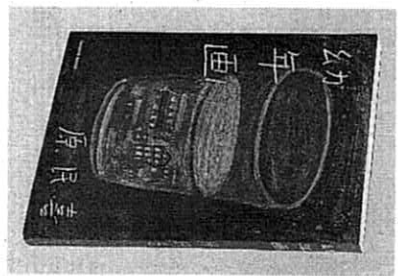
模図作品の怖さ、凄み、それはをどう論じるのか。『わたしは真悟』における「高度」のモチーフの発見、『赤んぼ少女』の執拗ともいえる議論のほてりに対し、現実と虚構の対立を超越する論理―対象を個体として捉えること―の鮮烈。これらの作品論を経て、『最終章の「アラ」論は、近世文学研究者としての

著者の思いを込めた章でもある。典拠論を導入した時にたちまち作品の魅力が損なわれる危険。しかし著者はあえて「アラ」が直接参考にした文献を曝す(これは説得力がある)。古典文学に馴れている我々はそれを「典拠」と認識するのに違和感はないが、現代の読者には「八生きている。だから本書が近世文学研究者に衝撃を与える可能性について、私は無関心ではない。言葉が本書に輝出する。それは二つの焦燥に起因する。その位置を占める典拠論の壁をなかに突破できないこと。模図かずおへの無理解読者と典拠論に自足する研究者―彼らへの感情的な反発が本書のモチーフの一つであり、それを論理的に「乗り越えよう」としたのが本書である。だから、本書の基調にはフアンティック(熱狂的)なものが感じられる。

模図作品の怖さ、凄み、それはをどう論じるのか。『わたしは真悟』における「高度」のモチーフの発見、『赤んぼ少女』の執拗ともいえる議論のほてりに対し、現実と虚構の対立を超越する論理―対象を個体として捉えること―の鮮烈。これらの作品論を経て、『最終章の「アラ」論は、近世文学研究者としての

幼年画

原民喜著



(サウター・ブックス・1700円)

あなたにもこんな経験はないだろうか。大切な人ともむしゃぶりと暮らして、おもしろいところのたどたどしき魂を震わせる幼子に戻って、つげば、初めて触れる世界に、な想いを語りたくなる。気がる。幼い心に宿ったさまざまなありありとよみがえってくる。原民喜の連作短編集『幼年画』とはそんな幼子自身による幼き日の物語。この世に生まれ落ちて、物心ついて、すべてが初めてのことばかりだ。この頃の、いのちの歡び、哀しみ、怒り、驚き、おののきに満ちたさまざまなほほえみに、光景がそこにはある。柔らかな手のひらでそっと守ってあげたいようなカラダ細工の心が静かに震えている。

主人公の雄一は原民喜の分身。想つ力の強い子だ。目を閉じて、何でもいから見たら、すぐその見たいものの形が浮んで来る。その想像力はあまりに感じやすい心と表裏一体のものである。『母よ、あなたも胎内に僕がいたとき、あなたを駭かせたとい

その結果を受けて乳房や卵巣を切除し、贈児の遺伝子診断で妊娠中絶を選択する人が増えている。さらに「次世代シケンズ」は受精卵の全遺伝子を調べ、病気や欠点に結びつく遺伝子を把握する「プレド」が直接参考にした文献を曝す(これは説得力がある)。古典文学に馴れている我々はそれを「典拠」と認識するのに違和感はないが、現代の読者には「八生きている。だから本書が近世文学研究者に衝撃を与える可能性について、私は無関心ではない。言葉が本書に輝出する。それは二つの焦燥に起因する。その位置を占める典拠論の壁をなかに突破できないこと。模図かずおへの無理解読者と典拠論に自足する研究者―彼らへの感情的な反発が本書のモチーフの一つであり、それを論理的に「乗り越えよう」としたのが本書である。だから、本書の基調にはフアンティック(熱狂的)なものが感じられる。

模図作品の怖さ、凄み、それはをどう論じるのか。『わたしは真悟』における「高度」のモチーフの発見、『赤んぼ少女』の執拗ともいえる議論のほてりに対し、現実と虚構の対立を超越する論理―対象を個体として捉えること―の鮮烈。これらの作品論を経て、『最終章の「アラ」論は、近世文学研究者としての

「子ガイナベビ」、筋肉よくて、どこか悪いのかを改めて議論する必要があり、と結んでいる。民主主義社会では広く国民的な議論を経、人間の根本が壊されないよう努力して、いかに大切である。健全な議論の進展を期待したい。

(脳神経外科医 伊吉田俊夫)